



TITLE:

新中國における戊戌變法研究

AUTHOR(S):

小野, 信爾

CITATION:

小野, 信爾. 新中國における戊戌變法研究. 東洋史研究 1958, 17(3): 381-390

ISSUE DATE:

1958-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148112>

RIGHT:

新中國における戊戌變法研究

小 野 信 爾

新中國における戊戌變法研究はかなり盛んであると云えよう。阿片戦争以来の中國民族解放闘争史上、太平天國に次ぐ一つのピークとしてその進歩的・愛國的な意義が強調されていることも一つの理由であろうし、また「戊戌變法」(近代史資料叢刊第八種)——一九五三年「譚嗣同全集」——五四年——等々、關係資料の整理、公刊が進んだことも研究を刺激する條件であつたと思われる。

この運動は列強による侵略の激化と日清戦後の國內的危機、民族ブルジョアジーの擡頭を背景に、帝國主義の壓迫と封建專制支配の桎梏からの解放を求めた政治的思想的運動であつた。しかし「一部の地主、官僚、富商から轉化」して来た新興資本家、及びその代辯者の階級性格の曖昧さと力量の不足とは、その運動を改良主義の枠内におしとどめた。つまり「封建制度を根本的には變革せず、しかも資本主義を發展させ得る」ような改革措置を要求する政治的妥協のコースを歩ませたのである。それは絶對多數の農民とは對立しつつ、支配権力上層と結びつくことによつて「上から下への改革」の實現を幻想した。その失敗は、したがつて偶然的、個人的原因によるのではなく、必然的な歸結であつたが、中國史上最初のブルジ

ョア勢力の政治舞台への登場、運動の愛國的性格、革命運動への轉機となつた點等で、その意義は没すべからざるものがある。これがどの論者にも共通する基本的な見解のようである。

だがこれまでに公刊された資料類もそうであるように、現在のところ、運動の思想的側面の研究が壓倒的で、社會的經濟的背景としての民族資本、及びそれと運動との具體的な關聯は殆ど究明されてない。これは一つには中國近代史研究全體の弱點として已むを得ないこともあるが、最近の經濟史資料の整備狀況からみると、この不滿の解消も遠からぬことと期待される。

× × ×

先ず概説書からあげると范文瀾「中國近代史」上篇第一分冊(一九四七年初版)がある。これは第七章で變法維新運動をかなり詳細に論じており、特にその性格規定、政治的派系の分析、自立軍起義の位置づけなど以後の諸研究に出發點を與えている。專著には胡濱「戊戌變法」(五六年)があり、所論には特に目新しい點もないが、變法前後の政治過程を知る上で便利である。

研究者では一九五七年に「戊戌變法史論叢」(「戊戌變法史論」五

五年を増補、改訂したもの、収録論文十四篇を發表した湯志鈞が研究範圍の廣さ、立論の大膽さ、論旨の明快さなどで注目される。湯氏が變法運動の歴史的發展、政治的過程の解明に精力的に取組んでいるのに對し、思想史、哲學史の分野では、「康有爲譚嗣同思想研究」（五八年、収録論文七篇）を出した李澤厚（哲學研究所）が、後述する二つの論争の何れにも立役者となつてゐるのが目立つ。

關係の論文集では北京大学中國哲學史教研室編「中國近代思想史論文集」（五八年）、人民大學歷史教研室編「中國近代思想家研究論文選」（五六年）の二つがある。前者は「中國近代思想史講授提綱」（五四年）編纂の基礎となつたもので、林則徐から梁啓超に至る變法維新關係の論文を十二篇収録しており、個々の思想家の問題點をつかむ上で便利である。

雜誌、新聞等に發表された論文に至つては、四九年以来百篇を超えるが、特に初期のものは殆ど入手出来ないものばかりである。そのため解放後の動向を探るといふ點では萬全を期し難く、また戊戌變法について私自身特に研究してゐるといふ譯でもなかつたので、以下の所論にもつはずれの點も多いかと思う。初めにお断りして、これから中國學界での研究動向と問題點について簡単な紹介を試みることにしたい。

× × ×

先ず變法前史ともいふべき、阿片戦争以来の維新思想の展開については、主として政治過程との關係において湯氏が、思想的過程については李氏がそれぞれ代表的な分析を見せてゐる。維新思想の展開を外的要因——外國の中國侵略——、内的要因——洋務運動の行詰り、破産、民族資本の成長——との關係でとらえ、阿片戦争、

アロー戦争、中佛戦争、日清戦争と中國の半植民地化が進行し、危機が増大していつた各段階毎に維新思想は發展し、その擔い手も交代していつた。即ち西洋の技藝を學ぶことから、ブルジョア的な經濟的改革要求へ、更に政治的改革要求へと高まり、それに照應して指導的思想家も開明地主（總源、馮桂芬等）、洋務派から分化した地主官僚（薛福成等）、ブルジョア化した地主（鄭觀應、何啓）とその代表する階層が轉換したというのが湯氏の見解である。李氏によれば、變法維新思想の成立は十九世紀七、八十年代であり、直接には洋務思想から分化したものであつた。彼等の思想は第一段（七十年代後半——中佛戦争）の微弱な經濟的改革の要求から第二段（日清戦争前まで）の微弱な政治改革の要求へと進み、基本的には洋務論の「中體西用」思想から脱しきれなかつたものの、次第に獨立した性格のものに變つて行つたのである。この場合、三、四十年代の維新思想と七、八十年代を結びつけるかはしとして馮桂芬の役割が高く評價されてゐるのは注目される。

清末思想史は、強烈な社會的政治的問題意識によつて特徴づけられてゐる。それは「焦眉の民族的矛盾と階級闘争が思想家達に傍觀の餘裕を與えず、全力を當面切迫した社會・政治問題の研究討論及び實踐活動に傾注させた」（李氏）からであるが、その際思想家達の理論的基礎として大きな役割を演じたのが公羊——今文經學であつた。そもそも弛緩した清朝支配體制の再建を命題として再興した公羊學派が、何故一轉して改制變法論の思想的武器となつたか。これについては湯氏に公羊學派中の「議政派」、「經師派」を對比して論じた好論文がある。思想の發展にはその内在的要因よりも、むしろ現實の課題に對決する思想家自身の姿勢こそが問題なのである。

其の他では洋務派のイデオログとして出發した薛福成が、光緒初年を轉機に、民間資本の發展を主張する變法論に轉換したことを當時の中國の社會、經濟上の變化と關聯づけて論じた劉世海、新聞人、變法自強論の首唱者として王韜を取上げた謝無量兩氏の論文が興味深い。

一八九五年（光緒二十一年）日清戰爭の敗北と馬關條約の締結により、清朝の危機が更に深刻化すると、變法自強運動は飛躍的に發展した。同時に露、英、米、日各國間の矛盾も激化し、中國々内の對立、政争と結びついて複雑な政治過程を現出する。もちろん變法運動の發展は單に民族的危機に激發されたというだけでなく、九五年から九八年にかけての急テンポの民族資本の成長を社會的、經濟的背景としていることは李時岳他殆どの研究者の肯定するところである。かかる民族資本の政治的、經濟的要求を代表して變法運動は康有爲等の指導の下に先ず學會の設立、新聞・雜誌の發行等によつてその組織、宣傳、啓蒙活動を進め、或る程度大衆的な政治勢力を結集する。その中で變法派は清朝内部の帝黨と結びつき、后黨（守舊派、洋務派）と對抗しつつ、戊戌百日維新を實現するに至るのであるが、この政治過程の分析、研究は全く湯氏の獨壇場だと云つてよい。當時の清朝支配階級内部の派閥關係の分析、帝黨（光緒帝、翁同龢）と康有爲等變法派との政策面の矛盾と結合の必然性の解明、「學會、報刊」の設立狀況と政治的役割等、その研究は殆ど餘すところがない。殊に未刊の「汪穉卿先生師友手札」を利用して、政變の黒幕としての李鴻章の役割、上海「時務報」における汪康年と康梁派の主導權争いの事情と變法運動の利用と抑制を狙つた張之洞の意圖を解明したことは學界への大きな寄與と云えよう。

光緒新政については、同じく湯氏が新政内容を時間的推移と政局の展開と併せて詳細に分析し、康有爲の建議は經濟的なもののみが施行され、眼目である政治的改革は后黨との關係が極度に緊張する迄は殆ど採上げられなかつたことを論じている。帝黨の目的は變法派と異り、政治の主導權を后黨から奪回するための一つ的手段として新政を行つたのであつて、民權の伸張等は全く論外の沙汰であつた。ブルジョアジーの代辯者である康有爲等もその點では不徹底で、變法派——帝黨聯合の形成は、開明地主層との妥協の上に成立したものであることを劉仁達も述べている。

變法派——帝黨のあらゆる妥協的措置にも拘らず、后黨は着々と反擊の準備を進め、遂に政變が発生するのであるが、その直前に所謂「衣帶の密詔」が出される。これについても、湯氏はその事實を考證し、それが英、日に緊急保護を求めると共に、一時康有爲を離京させて帝、后兩黨の矛盾を緩和し、同時に南方に勤王派の力を蓄積させるといふ意圖から出たものであると推論している。

結局、戊戌變法は反動勢力に壓殺されて「君子們的幻想」に終つたのであるが、維新派（帝黨も含めて）内部の複雑、不統一もその失敗を加速したものであつた。これについては、右派（翁同龢、孫家鼐、嚴復等）、中道派（康、梁、容闓等）、左派（譚嗣同、唐才常等）に分つ范文瀾の見解が湯氏をも含めて大體主流であるが、獨り李澤厚は康、梁を穩健派として譚（激進派）とともに左翼にかぞえ、右翼を第一派（康、梁支持者、陳寶箴、徐致靖、黃遵憲等）、第二派（帝黨——翁同龢、文廷式、孫家鼐、張謇等）、第三派（政治的投機者——張之洞、袁世凱）といった分類を立てている。問題は康、梁を左派に數えていることだが、これは後述する李氏の康有爲

思想の評價とも關聯しているようである。

次に、變法に對する外國の干涉の問題であるが、英・米・日はむしろ變法を支援する側に廻つた。それはこれらの諸國が中國の資本主義化、自強を望んだからではなく、親露政策をとる后黨に對する反撥であり、より御しやすい新政權の出現を欲したからに外ならない。變法思想の啓發に大きな役割を果した廣學會（光緒十三年上海で設立）以来のアレン・マーチン・リチャード等英米人宣教師の活動も、その政策の一翼を擔つたに過ぎない。しかも例えば譚嗣同すらも英・日との同盟を主張したように、變法派全體に帝國主義國の善意に對する幻想があつたことは、變法思想の致命的弱點の現れてあるというのが支配的な見解である。

戊戌變法の失敗は同時に中國における改良主義の破産でもあつた。これを境に革命主義が中國近代史の主流となるのであるが、その決定的轉機は一九〇〇年の自立軍起義に求められる。當時まだ革命派と改良派は明確に一線を劃するに至つておらず、互いに連絡、協力を保つていた。唐才常等は義和團の機に乗じて再舉を計り、康・梁の資金と革命派の組織に頼つて、革命とも保皇ともつかぬ曖昧な綱領の下で叛亂を準備したのであるが、結局失敗に終つた。自立軍失敗後、變法派左派は革命に走り、康・梁はますますその反動性をつよめ、改良派と革命派はここで斷然袂別するに至つたとするのが共通した見方であるが、湯氏は自立軍起義は本質的には未成熟のブルジョア革命だと斷定している。

このような戊戌變法研究の中で、未開拓の分野或は今後の課題として殘されている點は、變法運動のブルジョア性は一致した見解でありながら、新興の民族資本と變法運動家との具體的な關係が追究

されていないこと、またそれと關聯して例えば廣東、湖南といった變法運動に重要な役割を果した地方の事情についての研究が殆どないことである。前者については李澤厚等の「階級とその代辯者の身分が一致しないのは周知のことだ」（譚嗣同について）と涼しい顔の見解もあるが、一方では改良（變法派）の背景として地主・富商から轉化するプロシヤ型、革命（興中會）のそれに小營業者から轉化するアメリカ型と所謂資本主義の二つの道があるとする陳旭麓氏の問題提起もあつて注目される。しかし、當時新興民族資本の中心であつた廣東はともかくとして、最もラジカルな變法思想家を生み、變法運動の牙城となつた湖南の場合はどうなのか。經澤史資料の整理が始まり、未知の資料の發見利用も豫想される中國の今後の研究の進展に期待するところ大なるものがある。

× × ×

人物、思想研究の面ではさすがに康有爲についての論考が最も多く、譚嗣同がこれに次ぐ。梁啓超はむしろ政變以後の活動、思想が多く採上げられ、變法時期を對象とした論著は少いようである。

康有爲研究において最も注目されるべきものは、大同書成立年代をめぐる湯志鈞と李澤厚等の論争である。これは全體としての康有爲思想の評價に連なるので、兩者の見解を要約すると、李氏は康の思想體系は一八八五—一九三年即ち彼の三十歳前後に成熟、完成したもので、自然科學の新知識、佛學、陸王心學、禮運、孟子、及び黃宗羲等明末清初の思想等がその根底にあると主張する。これに對し、湯氏は、通説に反對して、康の思想は今文經學の「變」の哲學、進化論等の西歐ブルジョア思想、阿片戰爭以来の維新思想を三大支柱とし、八四年頃から九六・七一年にかけて漸次に形成されたとしている。

湯氏の立論は、從來殆どそのままに受入れられている康の「自編年譜」を全面的に辨偽することから出發し、「禮運注」の著作年代を八四年から九七年の「孔子改制考」著作前後に引上げ、更に「大同書」の執筆を一九〇一・二年の間と斷定している。康はその思想の獨創性を誇示し、「新學偽經考」における廖平、「三世」進化説に對する進化論の影響を否定するために故意に年譜に架空の記載を行つたとするのである。然も、政變前は君主立憲を意味した「大同世」が、後にはユートピアに引上げられ、君主立憲は「升平世」に比定されたように、康の「大同」思想はその政治活動と共に轉移している。従つて「大同」思想——康有爲思想の評価も范文瀾、李澤厚等の進歩的意義の強調、嵇文甫等の夢想視は何れも一面的で、政變前には進歩的であつたが、政變後は君主立憲の理論的基礎として反革命的な役割を果したとみなすべきであると主張している。

これに對しては李澤厚、張玉田が激しく反論し、「大同書」成書年代についての湯氏の考證を却けている。李氏によれば「大同」思想は君主立憲の範圍を超えた急進的民主主義的ユートピアであり、康有爲の前期の思想に屬し、當時においては充分進歩的であつた。張氏及び林克光の主張はもつとラジカルで、ともに「大同」思想に資本主義批判の要素、或は一定の人民性すらも認めて、高い評價を與えている。ただこの論争は湯氏が文史哲に發表した一論文「關於康有爲の『大同書』」をめぐつて行われたもので、湯氏の立論全體に對してではない。「三世」進化論に對する進化論の影響、禮運注成書年代に對する考證等、湯氏の鋭い考察に首肯すべき點が多いように思われるだけに、湯氏の論文集出版（その殆どが未發表のものである）を契機にこの論争が更に深められることを期待したい。

康有爲の思想體系の哲學的な究明には、唯心論、唯物論兩者の要因を含みつつも、全體としては汎神論的體系であるとする馮友蘭、その汎神論的體系中の唯物論的側面を主要な傾向とみる李澤厚等の見解がある。李氏は譚嗣同においても同様であるが、その自然觀、人性論、歷史觀における素朴な唯物論及び進化論的立場と、認識論、意識論等における唯心論的立場と矛盾したものを包含しながら「人類の精神、睿智の問題に對する、自然科學の影響をうけつつも、然も非科學的な卑俗な理解」を論理的紐帶として統一された思想としてとらえている。このような矛盾は彼等の背景である當時のブルジョアジーの進歩性と同時に特有の後進性を反映したものとされるのである。

譚嗣同については楊廷福に詳細な「譚嗣同年譜」の著があつて便利であるが、その政治的、社會的活動についての論考は乏しく、主としてその思想（仁學）に研究が集中している。彼の思想は「鮮明な革命の主張と要求をもつ改良派の異端」（陳旭麓）、變法論の最左翼として非常に高く評價されている。その系譜についても殆ど見解は一致しているが、哲學的評價をめぐつて論争があるのは興味深い。もともと新中國では、一時、唯物論は進歩的であり、進歩的なものは唯物論であるとする一種のドグマが支配的であつたように思われる。「龔自珍、魏源以來、孫文、魯迅（前期）」にいたるまで、中國近代の進歩的哲學思潮全體が明確なリアリズムと唯物論の一面をもつと共に、濃厚な唯心論と神祕論の要素をもっているが、基本的なものは先進的な唯物論的傾向であるとする李氏の主張等は、その代表的な例であるといえる。譚嗣同思想を「唯物論思想體系」とする楊正典を最左翼に、前述の李氏のように「唯物論的傾向の強い汎

神論體系」(汎神論は唯物論への過渡的なものとされる)とする李氏に至る様々な見解には、多少ともこのようなドグマの影響が見られるのではなからうか。これに對し、五五年以來、孫長江や張玉田が譚哲學は主觀唯心論である、或いはウルトラ主觀唯心論であると問題を提起し、李氏との間に論争をまきおこしている。

基本的な對立點は「以太」(エーテル)が物質(原質)か心力かというところにあるのだが、哲學には門外漢の私なので、ここで意見はおかないことにする。ただ注目されるのは孫氏を支持する張豈之が唯心論が客觀的に進歩的な役割を果す場合もあることを指摘し、譚嗣同の主觀唯心論哲學はそれが封建倫理名教に對する攻撃の武器となつたところに進歩的意義があるとしていることである。中國における史學、少くとも思想史の方法がドグマから脱却しつつあることの一證左として喜びたい。

その政治活動については、前述の「年譜」及び楊正典の「譚嗣同」が參考になる外、陳旭麓に思想的にはむしろ革命的な自由主義、反滿主義の立場をとりながら、政治的實踐では結局改良主義の枠を脱し得なかつた矛盾を衝いた論考があるだけである。

梁啓超はその政治的活動が民國以後まで及び、その影響も大きかつただけに、その取扱ひも前述の二人とは自ら異つてゐる。特に五六年以降、右派思想批判の一環として取上げられる傾向があるが、少くとも一九〇三年迄の彼は、何れの論文においても肯定的に評價されている。例えば胡濱は變法運動中における梁啓超の活動は改良主義の枠を越え、革命的でしたと、馮友蘭はその思想のブルジョアの側面と地主的側面を分析して、政變後の二、三年間、ブルジョアの要素が優位にあり、革命派に接近するが、その後急速に

反動化したことを論じている。彼はすぐれた宣傳者であり、西歐思想紹介、進歩的思想の普及で大きな影響を残したが、それは同時に康、梁一派に對する幻想を生み、客觀的には革命陣營の統一を阻むものであつたことは王介平の指摘するところである。その中で梁の教育論を洋務派との對比において分析し、その封建教育批判、西歐教育學説及び制度の紹介等々が、清末、民國初の教育界に與えた影響の大きさを論じた趙邁傳の研究が特異のものとして注目されてやからう。

西歐思想の翻譯紹介で變法運動上大きな役割を果した嚴復については、王栻に「嚴復傳」があり、また王汝豐、王介平等の論考がある。彼は變法運動では右派に屬するが、王栻は「戊戌變法以前において嚴復はもはや民主陣營からの逃亡兵であつた」とし、その思想的轉換點が一八九七年の「中俄交誼論」にもとめられることを指摘して注目される。

その他では黃遵憲について二、三の論著があるが、彼の場合むしろ詩人として取上げられ、變法運動に關しては麥若鵬「黃遵憲傳」で湖南における當時の狀況がやや詳細に述べられているのが興味深いだけである。

× × ×

以上、大體の研究狀況と動向を紹介して來たが、もとより不學のため當らぬ點も多々あつたかと思う。多少の責をふさぐために關係論文專著目録を作製して末尾に附し、研究者の便宜に供することにしたい。專著は私の氣の付いた範圍で収録し、論文は五六年八月以前の分は「中國近代史論文索引稿」(歴史研究所第三所内資料)により、以後は新華半月刊の索引によつて採録した。分類は私が便宜

的に行つたので無論完全ではない。論文名中※印を付したものは、私の看るを得なかつたものである。

略稱

「康有爲譚嗣同思想研究」——康譚研究

「戊戌變法史論叢」——戊戌論叢

「中國近代思想史論文集」——中近思論集

「中國近代思想家研究論文選」——中近思研選

浙江師範學院學報(例)——浙江師學報

○維新思想的展開

論十九世紀中國改良派變法維新思想的發展

李澤厚 康譚研究 新建設
吳・四・五

戊戌變法前的維新思想

湯志鈞 戊戌論叢 吳・四・五

※鴉片戰爭後五十年間中國的維新思想

榮孟源 歷史教學 五・二

清代常州經今文學派與戊戌變法

湯志鈞 戊戌論叢 五・二

※關於林則徐的評價

丁名楠 歷史教學 五・八

鴉片戰爭與林則徐

馮友蘭 中近思論集

論林則徐的思想

胡思庸 史學月刊 五・四

魏源——十九世紀中期的中國先進思想家

馮友蘭 人民日報 五・三・二六

魏源底思想

馮友蘭 中近思論集 五・八

鴉片戰爭時期的進步詩人龔自珍

梅英超 光明日報 五・六・六

※馮桂芬的思想

周輔成 歷史教學 五・九

※馮桂芬是不是一個具有資產階級民主思想的改良主義者

馮桂芬的思想

王 楫 南京大學學報 五・三

※王韜——中國歷史上第一個報刊政論家

方漢奇 新聞與出版 五・二・三〇

※王韜的改良主義思想

沈鏡如 浙江師學報 五・一

試論王韜的改良主義思想

吳雁南 史學月刊 五・四

王韜的思想

王維誠 中近思論集

王韜——清末變法論之首創者及中國報道文學之先驅者

謝無量 教學與研究 五・三

薛福成的社會經濟思想及其社會經濟背景

劉世海 新建設 五・三

薛福成的思想

黃子通 中近思論集

※馬建忠在「適可齋記言」裏所表現的思想

任靜吾 光明日報 五・二・二四

馬建忠的思想

任繼愈 中近思論集

何啓胡禮垣的改良主義思想

任繼愈 中近思論集

陳熾的思想

周輔成 中近思論集

鄭觀應其人及其思想

王永康 史學月刊 五・一

鄭觀應的思想

周輔成 中近思論集

○變法運動及戊戌變法

戊戌變法回憶

張元濟 新建設 五・一

※試談甲午戰爭中國半殖民地半封建經濟狀態的完全形成

顧 林 歷史教學 五・四

※戊戌變法在近代革命史上的貢獻

王其渠 歷史教學 五・二

※戊戌變法與民主憲政運動

王崇武 光明日報 卅·四·四

※論戊戌變法與立憲

謝興堯 新建設 卅·二

※論翁同龢與戊戌變法的關係

胡濱 光明日報 卅·一·三

※翁同龢與戊戌變法——對胡濱同志「論翁同龢與戊戌變法的關係」一文的商榷

徐頌芳 光明日報 卅·三·三

戊戌變法

徐嵩齡 人文科學雜誌 卅·二

戊戌變法時清朝統治階級內部各派系的分析

湯志鈞 戊戌論叢

洋務運動與戊戌變法

湯志鈞 戊戌論叢

翁同龢與戊戌變法

湯志鈞 戊戌論叢

康有為的新政建議和光緒皇帝的新政「上諭」

湯志鈞 戊戌論叢

戊戌變法時學會和報刊

湯志鈞 戊戌論叢

關於光緒皇帝的密詔

湯志鈞 戊戌論叢

戊戌「六君子」

湯志鈞 戊戌論叢

戊戌變法

胡濱 一九五·六

紀念戊戌變法運動六十周年

姚枚 歷史教學 卅·八

有關近代史小資料兩則

學術月刊 卅·二

(1) 戊戌變法時湖南提倡新思想的幾種刊物

劉仁達 歷史研究 卅·四

(2) 康有為與吳佩孚書

張寄謙 光明日報 卅·七·七

從戊戌變法看資產階級改良主義者的道路

邵循正 光明日報 卅·七·七

紀念戊戌維新運動六十周年

邵循正 光明日報 卅·九·元

戊戌維新運動的積極意義

邵循正 光明日報 卅·九·元

○戊戌變法與外國關係

戊戌變法與日本

沈鏡如 歷史研究 卅·六

※戊戌變法前後英帝在華人員的操縱干涉

林樹惠 歷史教學 卅·二·〇

※戊戌變法與英帝國主義

王崇武 歷史教學 卅·六

戊戌變法與美帝國主義

湯志鈞 戊戌論叢

※李提摩太——一個為帝國主義服務的傳教士

丁則良 進步日報 卅·三·九

※天主教士中兩個特務間諜——樊國樑和安治泰

邵循正 進步日報 卅·九·七

傳教士林樂知李提摩太的思想——帝國主義奴役殖民地人民的工具

馮友蘭 中近思論集 光明日報 卅·五·九

○自立軍起義關係

嘉弘 歷史研究 卅·八·餘白錄

自立會唐才常等與會黨的關係

湯志鈞 戊戌論叢

唐才常和自立軍起義

湯志鈞 戊戌論叢

○人物研究

康有為

康有為

宋雲彬 一九五·五

關於康有為的「大同書」

湯志鈞 文史哲 卅·一

康有為變法思想溯源

湯志鈞 戊戌論叢

康有為的「大同」思想和「大同書」

湯志鈞 戊戌論叢

康有為「禮運注」成書年代考

湯志鈞 戊戌論叢

論康有為的大同理想

李澤厚 康譚研究 文史哲 卅·二

論康有爲的托古改制思想

李澤厚 康譚研究 文·史·哲 五·五

論康有爲的哲學思想

李澤厚 康譚研究 哲學研究 五·一

大同書的評價問題與寫作年代

李澤厚 康譚研究 文·史·哲 五·九

康有爲的教育思想

陳景曙 光明日報 五·八三

大同書十卷

朱謙之 讀書月報 五·一

※「大同書」的思想實質——兼論中國近代思想上三種烏托邦

張豈之 人文雜誌 五·二

※康有爲梁啟超改良派所繼承的傳統是什麼？

來新夏 爭鳴 五·五

※試論康有爲空想理論（大同書）的階級基礎

陳周棠 中學歷史教學 五·二

關於「大同書」的寫作過程及其內容發展變化的探討

張玉田 文史哲 五·九

康有爲底思想

馮友蘭 中近思論集

論「大同書」

林克光 中近思研選

○譚 嗣 同

譚嗣同——近代中國啓蒙思想家

楊正典 一九五五

譚嗣同年譜

楊廷福 一九五七

論譚嗣同的變法思想及其歷史意義

鄭鶴聲 文史哲 五·九

譚嗣同思想研究

楊正典 光明日報 五·二·三

關於譚嗣同變法思想的補充意見

多尼 光明月報 五·三·三

論譚嗣同的哲學思想與社會政治觀點

李澤厚 新建設 五·七

論譚嗣同哲學思想的唯心主義性質

張玉田 光明日報 五·五·六

※譚嗣同是唯物主義者嗎？

陳諸家 北京日報 五·一·二

關於譚嗣同哲學思想的研究 對孫長江先生兩篇文章一此二

意見 李澤厚 康譚研究 哲學研究 五·三

對譚嗣同哲學思想的幾點看法 張豈之 人文雜誌 五·三

關於譚嗣同哲學思想研究的幾個問題

孫長江 教學與研究 五·二

論譚嗣同的民主主義思想與改良主義政治實踐的矛盾

陳旭麓 學術月刊 五·一

試論譚嗣同 孫長江 中近思研選 教學與研究 五·二〇

○梁 啟 超

梁啟超底思想

馮友蘭 中近思論集

戊戌變法時期梁啟超的思想

胡濱 光明日報 五·三·一

批判梁啟超的唯心主義哲學

朱永嘉 復旦學報 五·一

戊戌政變至辛亥革命期間的梁啟超

胡濱 新建設 五·四

論梁啟超的史學

胡濱 文史哲 五·四

梁啟超的教育思想

趙迺傳 華東師大學報 五·一

論改良主義者梁啟超

王介平 中近思研選

——梁啟超政治思想的批判——

○其 他

嚴復傳

王 棡 一九五七

※嚴復思想批判

※嚴復在維新運動時期（一八七〇—一八九〇）的思想活動

侯外廬 新建 設 五・三

論嚴復

嚴復思想試探

——嚴復之翻譯及其思想之初步試探——

王 栻 南京大學學 報 五・四

王介平 教學與研究 五・三

王汝豐 中近思研選

黃遵憲傳

※晚清詩人黃遵憲

※關於晚清詩人黃遵憲（討論）

麥若鵬 一九五七

王 瑤 人民文學 五・二

任訪秋 人民文學 五・一

王 瑤

追 加

戊戌時代的思想解放

關於戊戌變法

戊戌變法的歷史意義

戊戌變法六十年

譚嗣同哲學思想

黃公度先生年譜

張謇傳記

※有關戊戌變法的史料

戴 逸 歷史研究 五・九

劉仁達 " "

范文瀾 人民日報 五・九・元

劉大年 " "

楊榮國 一九五七

孫仲聯 人境廬詩草箋註

（二卷）所收

劉厚生 一九五八

宋雲彬 光明日報 五・三・三

追 記

校正中に入手した人民日報九月二十九日號によると、九月二十八日、即ち六君子殉難の日に中國史學會と科學院歷史研究所第三所共催による戊戌變法六十周年紀念學術討論會が北京で開かれたという。席上、關係論文十篇が提出、配布され、主として戊戌政變の意義と康有爲思想の評價について討論が行われたと傳えられるが、何れ何らかの形で發表されることであろう。同日號はまた范文瀾と劉大年の紀念論説をも掲載している。范氏のそれは戊戌變法の思想解放、ブルジョアの啓蒙運動としての意義を強調したものであり、劉氏のそれは概論であるが本文で紹介した陳旭麓氏の中國ブルジョアジエの二つのコースの指摘をより明確に提起しており注目される。

同じく本文執筆後に入手した歷史研究九期所載の戴逸・劉仁達兩氏の論考はそれぞれ前記の二論説と殆ど一致した論旨のものである。前者は政治理念、文化・教育、更に世界觀の上で變法論が如何に舊思想と對決し、これを超克したかを論じたもので、特に君權神授説の批判、及び文化・教育面における業績が後の革命運動の發展に大きな影響を残したことを強調している。後者は總論的に變法運動を考察したものであるが、變法派の一部が新興ブルジョアジエと非常に密接な關係にあつたことを指摘し、譚嗣同・康廣仁・宋育仁・劉古愚・梁啓超等についてそれぞれ事例をあげているのは興味深く、從來未開拓のこのような面での研究が今後更に深められることが期待される。